

## 編集後記

ニューヨーク大学で「20世紀の100大ニュース」を問うプログラムが企画され、第1位は広島への原爆投下、第2位はレイチェル・カーソン（1907-1964）の名著 *Silent Spring*（邦訳：沈黙の春）であった。カーソン女史が警告を発したのは化学物質の使用を直ちに中止せよということではなく、「よく効く」けれども有毒な薬品が、その毒性についてほとんど、もしくは全く何も知らない人々の手によって無頓着に使われていることが問題である—ということである。カーソン女史が40年前に提起した問題の“本質”は21世紀に入っていっそう重要性を増してきたように思う。(K. S.)

本学に就職して十年ほどが経ってから、ようやくインスティテュート・メンバーになり編集委員の活動をしましたが、これで女性学インスティテュートの「重み」を実感できました。年間を通じて様々な講演、授業、研究助成、雑誌の編集が続き、神戸女学院とともにインスティテュートが着実に歩んでいるように思います。今後は『女性学評論』への専任教員の投稿、ならびにインスティテュートへの参加が増えることを願っています。(K. H.)

今年度は新しい試みの連続セミナーが催され事務関係など結構多忙であった。懸賞論文は去年並みぐらいは応募がみられるものと……いささか楽観しすぎたようである。せつかくの機会、若い研究者の卵の皆さん、来年こそは。「男>女」から「男/女」へのために。(M. R.)

21世紀で最初の『女性学評論』をお届けします。

今回も学内の研究者ばかりでなく、学外の研究者にも論文や書評を寄稿していただけたことを何よりうれしく思います。女性学の「学」としての特徴は、その視野がすべての人間にむけて「開いている」ことにあると考えるからです。今回の特集は「男らしさ」と「女らしさ」についてでした。いまの私たちの課題の一つは、男女の「らしさ」を規定することではなく、男女の「らしさ」を規定してきた根拠を明確にすることです。(N. K.)

学生懸賞論文の最優秀賞がなかったのが残念。文春の芥川賞みたいに候補作、次点作も掲載されているのかも。それから、今後の課題として、本誌上で論争の応酬のようなコーナーがあってもいいのではないか。日本人はディベートが苦手ですが、ポレミックすぎないかぎり論議はあるほうがエキサイティングだと思います。(Y. K.)

.....